

守門袴岳～大岳山行記録



目的地	守門袴岳～大岳	山人	笠原正雄単独	期 日	平成20年4月5日(土):曇時々晴
地名	時刻	記 事			
与 板	5:15 発	サングラスを忘れる。コンビニでリップクリームを買う。			
大平路上駐車場	7:25 歩発	除雪は大平橋の先まで進んでいるが、手前にゲート。約15台、県外車が多い。スキーがほとんどで、大岳へと歩き出して行く。朝食後、橋手前で右折し雪に上がる。			
猿 倉 橋	7:55	歩き出してすぐにスノーシューを履く。曇っているが寒くは無い。			
登 山 口	8:05	東京からの男と一緒にいる。年配の単独男が無言でストックを短く持って追い越して行った。スノーシューをぬいで登りに掛かる。			
尾根に上がる	8:30～8:40	急登を終える。シャツを一枚脱ぎ、日焼け止めを塗る。スノーシューを履く。			
コース外れ	8:50	踏み跡に惑わされて夏道に下りる方向に進んでしまった。修正して東京男と合流。			
谷 内 平	9:20～9:25	日差しを受けるがピークは曇っている。藤平山は良く見える。アンパンを食べる。			
細 尾 根 で	9:50	シューをぬいでみたが、やはりぬかるので再度履く。東京男が付いて来ない。			
滝 見 場	10:10	ここの岩場は雪が覆っていた。オカバミ滝が見える。滝音は左の沢の方が大きい。			
一 枚 着 る	10:25	登りの途中。陽が差したり陰ったりしている。風が出て来て寒く一枚着る。			
雪原の登り	10:40	森林を抜け出して雪原登り、大岳が見える。雲の陰が雪の上を流れて行く。			
下山者と会う	11:00	同年代の単独者。青雲まで行ったが、山頂はガスで見えない。暫らく待ったが好転せず諦めて下山して来たと言う。			
ヤッケを着る	11:15	大岳分岐の赤旗が見える所まで来て着る。大岳から吉ヶ平分岐鞍部に向かってスキーで降りて来る2人が見える。その後、彼らはこちらまで上がって来なかった。			
赤旗(大岳)分岐	11:20	軍手から毛糸手袋に替える。朝追い越していった年配男が降りて来た。「早いですね」と声を掛けると、「寒～むい」と言って下って行った。			
兔 を 撮 影	11:40	山頂方向から犬かと思える動物が下りてくる。かなり近くまで来た。拡大ズームを一杯に利かせて撮影する。その後、大白川方向に去って行った。			
守 門 袴 岳	11:50	誰も居ない。風があったが我慢出来ぬ程では無い。下田方面を見下ろす所に風衝穴跡があった。それをピッケルで更に掘り下げて、腰を下ろす。風が幾分和らいた。烏帽子山等近くはくっきりと見えるが、浅草岳頂は雲が掛かっている。			
”	12:15	大岳からスキー若者(A)が上がって来た。彼は前記2人の前に鞍部に降りたと言う。写真を撮って貰う(左写真)。暫らく二人で過ごす。大岳の雪庇は落ち始めた。谷内平付近で前後した東京男は途中で断念したのだろうか、上がって来なかった。			
下 山 へ	12:55	再び風が出て来た。下り始めると大白川の尾根に2人が見え、もう1人が袴岳頂直下を登っていた。先行で滑降下山したAに青雲の登り返しで追付く。			
吉ヶ平分岐鞍部	1:20	赤旗が施してあった。分岐からは急降下だった。そして急登が待っている(中写真)。			
振 り 返 る	1:40	傾斜の緩んだ台地で、Aと一緒に振り返り雲の動きを待ちながら撮影(右写真)。			
守 門 大 岳	1:50～1:55	若者スキー9人隊が滑降準備中。1人女性が居た。また、ヘルメットの者も居た。中津又ノ頭人影がある。下山を始めるとAが上がって来た。スキーの下りは早いですが、登り返しがあると、その準備やスキー担ぎで遅れる。シール登高が不可能な傾斜面であった。右膝をひねると痛む、サポーターを強く締めて下山。			
キビタキ小屋	2:20	頂を下れば、すぐにクズレ軟雪となる。小屋の斜面側は雪が屋根を覆っていたが、正面は梁まで露出していた。日差しが出て来て暑くなりヤッケを脱ぎ、日焼け止めを塗る。Aが滑り降りて来た。			
保久礼小屋上	2:35	屋根の雪は片側が無くなっていた。長峰でスキーの2人を追い越す。			
大 平 上	3:20	作業舎が近くに見える所まで来て、スノーシューを脱ぐ。この手前で「ブナと一緒に朝を迎えたい」と洒落たことを言ってスキー男が上がって行った。			
大 平 橋	3:40	全くの快晴となって、ピークが良く見える。駐車地点に数人が下山してきた。			

袴岳と大岳の間を歩いて見たいと思った。予想していたよりも強いくびれであった。昨秋、同じコースで歩いているのだが、急降下は印象にあったが、登り返しはそれ程強く感じていなかった。無雪歩きと比較すると、猿倉橋～袴岳間はおよそ30分長く掛かった。これは、スノーシューの装着や、着込むために立ち止まる時間によるものと思う。従って、袴と大岳の間はほぼ同じ時間であった。山頂付近では曇りで、風もあったが、まずまずの一日だった。